Research Guide

East Asian Modernsim Studies Project: Workshop at Kyushu University 2019

ORGANIZER: TSUYOSHI NAMIGATA
GRADUATE SCHOOL OF SOCIAL AND CULTURAL STUDIES, KYUSHU UNIVERSITY

JSPS KAKENHI GRANT NUMBER 18K00509

Recommended Website and Furthering Reading: by Faye Yuan Kleeman

Friedman, Susan Stanford. ***Planetary Modernisms : Provocations on Modernity Across Time*****. New York: Columbia University Press, 2015.**

The book recasts modernity as a networked, circulating, and recurrent phenomenon producing multiple aesthetic innovations across millennia, from pre-1500 modernities, such as Tang Dynasty China ; to small-scale instances of modernisms, including Abbasid ceramic art; through the interconnected modernisms of the long twentieth century, paring figures ranging from E.M. Forster to Theresa Hak Kyung Cha. Rejecting the modernist concepts of marginality, othering, and major/minor, the author instead favors rupture, mobility, speed, networks, and divergence, elevating the agencies and creative capacities of all cultures, not only in the past and present but also in the century to come.

Wollaeger, Mark and Matt Eatough. Eds. ***The Oxford Handbook of Global Modernisms*****. Oxford: Oxford University Press, 2012**.

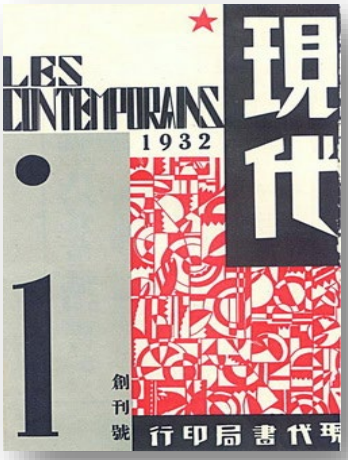
The Oxford Handbook of Global Modernisms expands the scope of modernism beyond its traditional focus to explore the contributions of artists from regions like Spain, the Balkans, China, Japan, India, Vietnam, and Nigeria. Together, these essays offer the most comprehensive worldwide examination of modernist studies available. Topics covered include: Richard Wright and photographic modernism; poetry of the Caribbean; Chinese modernism and Lu Xun's Ah Q-The Real Story; Ben Okri and magical realism; aesthetic autonomy in Paris, Italy, Russia; Cuba's avant-gardes; geography of Hebrew and Yiddish modernism in Europe; Japanese modernism in works by Kitagawa Fuyuhiko and Yokomitsu Riichi; and South African cinema.

The Modernism Lab
https://modernism.coursepress.yale.edu/about/

A virtual space dedicated to collaborative research into the roots of literary modernism. The site paid particular attention to the literary manifestations of a broader historical context, including the modernists' involvement with political movements such as socialism, feminism, liberalism, nationalism, and imperialism. The database traced the empirical information—such as references to Dostoevsky or Freud or Tagore in writers' correspondence—while the wiki offered interpretive accounts of how these influences played out in the modernists' formal and thematic concerns.

Research Guide by LI ZHENG（李征）

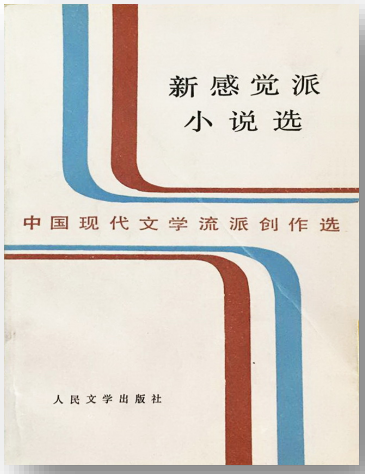
■ 施蛰存主编文艺月刊『现代』（现代书局，1932 年 5 月创刊）



中国现代主义文学研究的重要文献资源，首推文学期刊《现代》。这份杂志创办于 1932 年 5 月 1 日，是第一次淞沪战役后在短暂的文化虚空中最早出现的大型文艺月刊。施蛰存任主编，现代书局出版发行。中途杜衡加入编辑阵营，最初的编辑宗旨和办刊方针基本维持不变。后国民党派系的汪馥泉接手，杂志特色由“文艺刊物”一变而为“综合文化杂志”，仅出数期即告停刊。至 1935 年 5 月 1 日时止，总计出版 34 期。作为《现代》主编，施蛰存在编辑过程中经常借鉴日本办刊方法。他不但率先把弗洛伊德心理分析理论引入中国文坛，还身体力行创作了不少心理小说，成为中国现代主义文学代表性作家之一。包括鲁迅在内的中国现代著名作家，大都为《现代》撰写过稿件。特别是中国新感觉派作家，一边翻译介绍日本新进作家的作品，一边创作富有新感觉派特色的小说。除日本而外，欧美现代主义文学也是《现代》重点翻译介绍的对象。

■ 严家炎编『新感觉派小说选』（人民文学出版社，1985 年 5 月初版）

这本小说选是20世纪80年代作为“中国现代文学流派创作选”（全6册）丛书之一而编辑的，该系列中收录的《现代派诗选》、《象征派诗选》、《九叶派诗选》等，同属中国现代主义文学重要成果。编者严家炎在“前言”中说，20世纪20年代末期到30年代初期的刘呐鸥、施蛰存、穆时英等人，真正在小说创作领域把现代主义方法向前推进并构成独立的小说流派，时称“新感觉派”。由于他们的作品多半零散刊发，后来者搜求不易，所以特地编辑了这个选本。中国新感觉派作家的代表作，比如刘呐鸥的《热情之骨》、《两个时间的不感症者》，施蛰存的《梅雨之夕》、《将军底头》、《魔道》，徐霞村的《《MODERN GIRL》，穆时英的《上海的狐步舞》、《黑牡丹》、《夜总会里的五个人》，黑婴的《五月的支那》，叶灵凤的《朱古律的回忆》等，大都收录其中，颇便参阅。严家炎撰写的“前言”，对中日新感觉派的关系作了精心梳理，现已成为该研究领域的奠基之作。



■ 赵凌河著『中国现代派文学引论』（辽宁人民出版社，1990年12月初版）

有关中国现代派文学的系统研究始于20世纪80年代后期，当时辽宁大学出版社曾策划出版过“文艺新潮丛书”，最早推出的是周敬、鲁阳合著《现代派文学在中国》（辽宁大学出版社1986年7月初版）。数年后，辽宁人民出版社又接着出版了赵凌河著《中国现代派文学引论》，可见当时学者对现代派文学研究的热情。赵凌河的专著虽然后出，但是作者十余年研究的深厚积累，书中以刘呐鸥、施蛰存、穆时英等人的创作为重点，对中国现代主义文学思潮和文学作品特点、性质、源流以及在现代文学史上的影响等做了系统深入探讨。全书计分四章：第一章“现代派与中国现代文学”，第二章“施蛰存和心理分析”，第三章“刘呐鸥与都市文学”，第四章“穆时英和新感觉派”。作者认为，中国作家对西方现代主义的吸收具有如下特征：思想内容方面的有限接近与谨慎借鉴，艺术形式方面的积极移植与大胆实验。

科学研究費基盤研究（C）（研究代表者：波潟剛、18K00509）
「オーバーラップする異国趣味・郷土主義—東アジアモダニズム研究の基盤構築に向けて」

東アジアモダニズムのリサーチガイド（日本における中国モダニズム研究）

城山　拓也（立命館大学嘱託講師）

1　鈴木将久『上海モダニズム』（中国文庫、2012 年）

日本において、先駆的に中国モダニズムを取り上げた研究書である。本書の特徴は、民国期中国の上海を対象に、「都市大衆」や「文学と政治」をめぐる問題など、読み応えのあるテーマを考察している点にあるだろう。また、茅盾、瞿秋白、陶晶孫といった有名作家だけでなく、穆時英、戴望舒、路易士といったマイナーな作家を取り上げており、中国近現代文学の基礎知識を得ることもできる。日本では、中国モダニズムを正面から論じた研究書は、まだまだ少ない。本書とともに拙著『中国モダニズム文学の世界―1920、30 年代上海のリアリティ』（勉誠出版）などを読めば、中国モダニズムの様相を多層的に把握することが可能である。

2　濱田麻矢・薛化元・梅家玲・唐顥芸編『漂泊の叙事―1940 年代東アジアにおける分裂と接触』（勉誠出版、2016 年）

欧米諸国であれ、またアジア諸国であれ、モダニズムを考えるときに欠かせないのが、ナショナリティの越境という観点である。特に 1940 年代の中国が重要となるのは、日中戦争をきっかけとして、知識人が離散し、大移動が起こったという歴史的事実にある。本書では、広く東アジアを対象として、知識人が大陸中国、台湾、香港、朝鮮、日本など複数の国を行き来し、相互に影響を与え合う様相を浮き彫りにしている。しかも小説だけではなく、旧体詩、映画、演劇、音楽など、その対象は非常に幅広い。本書はいわゆる狭義のモダニズムを対象としているわけではないが、東アジアにおける近代性（モダニティ）のあり方を考えるうえで、有益な議論を行っている。

3　大東和重・神谷まり子・城山拓也編『中国現代文学傑作セレクション―1910-40 年代のモダン・通俗・戦争』（勉誠出版、2018 年）

日本では、中国モダニズムはもちろん、中国近現代文学について非常に議論がしにくい。その原因の一つに、議論の前提となる作品そのものを、日本人があまり読んでいないという現状がある。魯迅、茅盾、老舎……ええと、ほかに誰がいたっけ？　ああ、そうそう、張愛玲だ。でも、本書が示しているのは、おそらく多くの日本人が想像する以上に、1910～40 年代の中国で多様な作品が花開いていたという事実である。いわゆる狭義のモダニズム文学から世紀末ヨーロッパ・デカダンスに影響を受けた文学、探偵小説、SF 小説、中国伝統の通俗文芸、それに共産党系から国民党系のプロパガンダまで。中国モダニズムは、本書で翻訳、紹介している百花繚乱の作品群の上に成り立っているわけである。

科学研究費基盤研究（C）（研究代表者：波潟剛、18K00509）
「オーバーラップする異国趣味・郷土主義―東アジアモダニズム研究の基盤構築に向けて」

Researth Guide　by　謝　惠貞（Xie,Huizhen）

1.劉妍『横光利一研究：《上海》から《旅愁》まで』（長春：吉林大学出版社、2014）

本書は、同時代の東アジア作家との連帯を比較的に検証し、また作家・作品論にも時間軸の幅を見せた横光利一研究である。「モダニズム文学と上海の表象—横光利一「風呂と銀行」と劉吶鷗「礼儀と衛生」の比較」は、租界に表れている近代意識と女性像の分析を通して、両者の捉える〈近代性〉を考察し、「旧上海で浮遊する外国人像—横光利一『上海』とアンドレ・マルロー『人間の条件』の比較研究」は、『人間の条件』が『上海』への影響を否定する一方、両者とも革命を空間的に構築したと論じる。

また、「横光利一『上海』と茅盾『子夜』から見る「五・三十事件」の描写」では、『子夜』との比較を通して、横光が『上海』において日本の中国侵略を東洋と西洋の対立にすり替えて〈革命と形式〉の問題を処理したと論じる。さらに、「韓国モダニズム文学の旗手李箱における横光利一の受容」では『機械』の文体を受容した韓国の李箱の詩や、『眼に見えた虱』など妻の不貞で悩む夫の作品を彷彿させる李箱の『翼』が考察される。妻は植民地統治の象徴で、それにより朝鮮・夫が無感情・無能にされたと分析する。

2. 陳允元『殖民地前衛——現代主義詩學在戰前台灣的傳播與再生產』（台北：政治大学台湾文学研究所、博士号学位論文、2017）。

陳氏は映画監督黄亞歴と共編の《日曜日式散步者：風車詩社及其時代》（台湾：目宿媒體，2017）で、既にその研究成果の一部を発表しており、1970 年代末に発掘された風車詩社を手がかりに「戦前期台湾モダニズム」への解釈拡大を試みた。本質的な血統による台湾人の定義を拡大し、本島人楊熾昌ら、在台日本人作家西川滿、戸田房子、台日混血饒正太郎の四つグループに分け、「殖民地台湾」を中心とした 1930 年代東アジアモダニズム詩の世界性と同時代性を論じた。その成果としては、「帝国から植民地」の伝播の往復を確認し、その運動の前衛性は、植民地台湾においては、時差によるものというよりも、台湾のローカルな受容による解釈によるものだと論証したところにある。戦前台湾におけるモダニズム詩を理解するための重要な学術研究である。

3. 謝惠貞『日本統治期台湾文化人による新感覚派の受容——横光利一と楊逵・巫永福・劉吶鷗』（東京：東京人文社会系研究科博士号学位論文、2012）。

戦前台湾における横光利一受容の系譜を描き出したモダニズム小説研究として、お薦めする。まず、内地の文芸復興時期における楊逵による横光利一「純粋小説論」への肯定的評価を『台湾新聞』などで発掘した。楊逵は横光の通俗性提唱にはリアリズム的打開策を見出したと論じた。次は、巫永福の留学先である明治大学文芸科での横光や小林秀雄らとの師弟関係や 1930 年代台湾文芸グループの状況などに関する調査を通して、「首と体」と「眠い春杏」における日本語文体の模写から創造への過程を考察した。また、「純粋小説論」を意識している翁鬧は、「文芸大衆化」の議論を背景に、下層階級の描写に新たな技法を吹き込んだことを論じた。最後に、上海で活動した劉吶鷗は横光の「皮膚」の模作として「遊戯」

を執筆し、創作集『都市風景線』を成功裡に出版した「三つの書き換え」戦略を分析した。

リサーチガイド：大東和重（OHIGASHI Kazushige）

１．黄建銘『日治時期楊熾昌及其文学研究』（台南市作家作品集、台南：台南市立図書館、2005 年、中国語）

日本統治期の台南で活動したモダニズム詩人たちの結社、風車詩社は、ガリ版刷りの詩誌『風車』を計 4 号発行した。ただし現在見ることができるのは、台南の国立台湾文学館に保存される、第 3 号（1934 年 3 月）のみである。この第 3 号を、詩人の楊熾昌宅で発見したのが、成功大学歴史系の呂興昌教授である。呂教授の教えを受けた本書の筆者、黄建銘は、楊熾昌の詩作の世界へと深く入り、本書のもととなる修士論文を執筆した。その過程で、楊熾昌の家族や、風車詩社のメンバーだった張良典、あるいは風車詩社の詩を中国語に訳した葉笛氏や陳千武らからも情報を得つつ執筆した。本書の特徴は、その実証性にある。楊熾昌が学芸欄を編集していた『台南新報』を詳細に調査し、詩作の足どりを明らかにするのみならず、楊熾昌が影響を受けた西脇順三郎や北園克衛らの著作との比較検討を行い、楊熾昌の詩論には日本のモダニストたちからの大きな影響があることを明らかにした。楊熾昌及び風車詩社を検討する上で、最初に紐解くべき一冊である。

２．陳允元・黄亞歴主編『日曜日式散歩者 - 風車詩社及其時代』全 2 冊（台北：行人文化実験室・台南市政府文化局、2016 年、中国語）

2015 年に公開された、黄亜歴監督のドキュメンタリー映画『日曜日式散歩者』は、2017 年には日本でも公開され、日本統治期の台南で活動していたモダニズム詩人の結社が広く注目されるきっかけとなった。黄亜歴監督は、家族を含む関係者への取材や、楊熾昌・風車詩社に関する先行研究にもとづき、シュルレアリスムの手法を用いて、4 人の詩人、楊熾昌・李張瑞・林永修・張良典の人生を、彼らの作った詩・詩論・エッセイなどを引用しながら再現した。この映画の製作と合わせて編集されたのが本書である。詩人たちの詩の中国語訳を収めるのみならず、風車詩社に関する研究を収録する。また特記すべきは、編者の陳允元は現在風車詩社研究の最前線に立っており、2017 年には優れた博士論文「殖民地前衛 - 現代主義詩学在戦前台湾的伝播与再生産」（国立政治大学台湾文学研究所、2017 年 7 月）を執筆した。

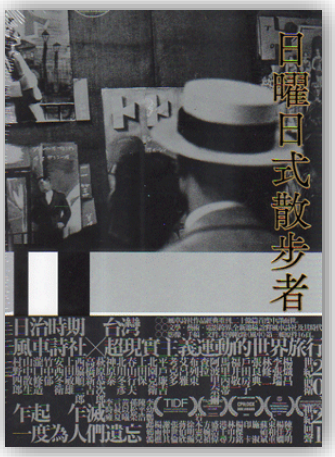
３．『台南文学の地層を掘る - 日本統治期台湾・台南の台湾人作家群像』（西宮：関西学院大学出版会、2019 年、日本語）

本書は、『台南文学 - 日本統治期台湾・台南の日本人作家群像』（関西学院大学出版会、2015 年）につづく、日本統治期台湾・台南における文学活動の研究の 2 冊目である。日本人作家を対象とした 1 冊目と異なり、2 冊目では台湾人文学者を研究対象とした。主な研究対象は計 5 名、呉新榮・楊熾昌・荘松林・王育徳・葉石濤だが、そのうち呉新榮については他の塩分地帯の詩人たち、楊熾昌については他の風車詩社の詩人たちも視野に入れ、荘松林については台南芸術倶楽部の作家たちに部分的ながら言及した。台南の文学者たちのうち、風車詩社に集った詩人、楊熾昌や李張瑞・林永修は日本内地、東京文壇におけるモダニズム文学の隆盛から影響を受けた詩人である。本書では特に、楊熾昌の東京における経験や、日本語によ

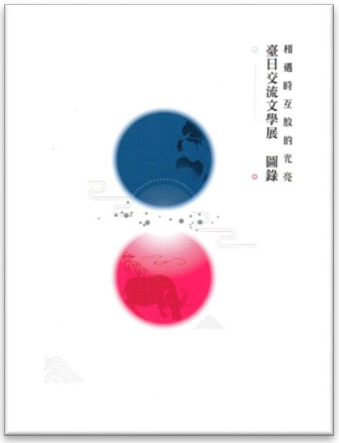
る詩作が植民地の地方都市台南とどのように関わっているのかについて検討を行った。

Research Guide　by　LAI YICHEN（賴怡真）

■　陳允元・黄亞歷編　『日曜日式散歩者―― 風車詩社及其時代』I、II（行人、二〇一六年九月）



本書は、一九三〇年代台湾におけるシュールレアリスム（surréalisme）詩の結社「風車詩社」(一九三三年) に関するアンソロジーの研究書である。「風車詩社」は、台南出身の楊熾昌（一九〇八年～一九九四年）を筆頭に結成された結社で、日本占領下の台湾で活動を行っていた。「風車詩社」の特徴でもあるシュールレアリスティックな作品は、政治性を欠き、現実から乖離したものとして批判の的となっていた。「風車詩社」という結社自体も一年余りで解散となり、その間に機関誌『風車』全四期（一九三三年一〇月～一九三四年一月、三月、一二月）が刊行された。一九七〇年代に再発掘されるも、これまで忘れ去られていたこの結社については、二〇一五年にドキュメンタリー映画『日曜日式散歩者 Le Moulin』（黄亞歷監督、台湾）が公開され、二〇一六年には、その作品と「風車詩社」に関する論文を集めた本書が出版され、新たな光があてられている。



■　吳佩珍・周華斌・顧敏耀・他編纂、賴怡真日本語訳『相遇時互放的光亮：臺日交流文學特展圖錄』（國立台灣文學館、二〇一六年二月）

本図録は、一九一六年に旧台南州庁が落成してから一〇〇年の歴史を迎えた二〇一六年に台湾国立台湾文学館で行われた特別展覧会「相遇時互放的光亮—臺日交流文學特展（輝き合う出会いから）」が開催された際に制作されたものである。台湾と日本の間における特殊な歴史を考察し、昔から頻繁に行われてきた交流の歴史にもとづき、一「見てみる」、二「考えてみる」、三「恋してみる」という三つのカテゴリーの展示が行われた展覧会の模様がまとめられている。

■　黄建銘『日治時期楊熾昌及其文學研究』（台南市立圖書館、二〇〇五年一二月）

楊熾昌研究をする際には欠かせない一冊であり、日本語原文の詩篇がかなり綿密に網羅されているほか、中日対照の訳文も収録されている。本書は黄建銘が台湾国立成功大学歴史學系に提出した修士論文（2002年6月）をもとにしたものであるが、現在、絶版となっているため入手しにくいが、この修士論文の電子ファイルは『國家圖書館ホームページ』（https://www.ncl.edu.tw/）における「臺灣博碩士論文知識加值系統」から全文をダウンロードすることが可能となっている。

リサーチガイド

Research Guide　by　Peichen Wu（呉佩珍）

1. 新文学雑誌叢刊

植民地期における日本語文学関係の雑誌の基本資料です。近代化とともに「台湾新文学」が始まったといえる。この「新文学雑誌叢刊」は、主な文学雑誌が収録されています。

2. 日本統治期雑誌デジタルリブラリー

http://stfj.ntl.edu.tw/cgi-bin/gs32/gsweb.cgi/login?o=dwebmge&cache=1561018358005

こちらは、台湾国立図書館がデジタル化した日本統治期に発行した現存している雑誌である。海外から検索可能。

3. 日本統治期台湾文学、台湾人作家作品集（全六巻）

こちらは、復刻した台湾人作家の日本語作品集と中国語作品一冊が収録されています。作家の年譜と作品年表も入っているため、各作家と作品を調査する場合には、便利です。

科学研究費基盤研究（C）（研究代表者：波潟剛、18K00509）
「オーバーラップする異国趣味・郷土主義―東アジアモダニズム研究の基盤構築に向けて」

Research Guide
Materials on Japanese Cinema Studies
Aaron Gerow

1) Markus Nornes and Aaron Gerow, *Research Guide to Japanese Film Studies* (University of Michigan, 2009)

My colleague Markus Nornes and I have already produced a research guide covering resources on the study of Japanese cinema, from major histories and reference books to introductions to the important libraries and archives. The Introduction is available on the Yale repository. The *Guide* was updated and translated into Japanese as *Nihon eiga kenkyu e no gaidobukku* (Yumani, 2016). I have also created a condensed online version, focusing on Japanese language materials in the Yale Library.

https://www.press.umich.edu/9362419/research_guide_to_japanese_film_studies
https://works.bepress.com/aarongerow/14/
http://www.yumani.co.jp/np/isbn/9784843349397
https://guides.library.yale.edu/JapanFilm

2) Noel Burch, *To the Distant Observer: Form and Meaning in the Japanese Cinema* (University of California Press, 1978)

A controversial work that both revolutionalized the way Japanese film history was conceived, as well as reduced that history to an a-historical essence. It is a Marxist history that fails to consider class in prewar Japan, but critiques Hollywood hegemony. The entire text is now available on online at the University of Michigan with a new introduction by H.D. Harootunian.

https://www.press.umich.edu/9362450

3) David Bordwell, *Ozu and the Poetics of Cinema* (Princeton University Press, 1988)

An alternative to Burch that rigorously historicizes the filmmaker often called the "most Japanese" of filmmakers, while also locating his filmmaking in a formal analysis based on Bordwell's rubrics of possible poetics of cinema. The entire text is also now available on online at the University of Michigan with a new introduction by the author.

https://www.press.umich.edu/9362478/ozu_and_the_poetics_of_cinema

Research Guide by Janet Poole

1. 서인식, "애수와 퇴폐의 미" [Sŏ Insik, "The Beauty of Longing and Decadence"] *인문평논* [Humanities Critique] 2, no. 1 (January 1940): 55-60.

For a contemporary analysis of Korean modernisms of the 1920/30s, scholars will be intrigued by this short essay by the historical philosopher and critic Sŏ Insik. Sŏ focuses on the pervasive literary phenomenon of nostalgia and decadence as a key to understanding aesthetic responses to his contemporary moment. His analysis is constellational as he differentiates three broad threads of nostalgia—the feudal, the modernist and the decadent—and uses that constellation to suggest the complexity of the historical (generational) and political context of modernisms in Korea. Sŏ's interpretation may be disagreed with, but grappling with his survey of writers offers a helpful entry into the literary terrain of the time.

2. 유종호, *다시 읽는 한국 시인* [Yu Chongho, *Rereading Korea's Poets*]. 서울: 문학동네, 2002.

Yu Chongho's book provides close readings of the work of four poets—Im Hwa, O Changhwan, Yi Yongak and Paek Sŏk. All were key modernist poets of the 1930s and all of them ended up in North Korea in the late 1940s, thus having their work banned in South Korea for the next four decades. By reading their lifetime's work, Yu offers a rare literary/textual study that crosses the colonial and postcolonial/post-division eras.

3. Harry Harootunian, *Overcome by Modernity: History, Culture, and Community in Interwar Japan* (Princeton University Press, 2000).

Harootunian's book offers long essays on a wide array of intellectuals who wrote about modernity and their present in early 20th century Japan, including Tosaka Jun, Kon Wajirō, Yanagita Kunio, Kobayashi Hideo and others. The study offers vital insight into questions about mass culture, urbanism, tradition and memory that animated debate amongst intellectuals and writers throughout the Japanese empire. The structure of the book is such that it may be read in order or consulted in parts for discussion of particular authors or texts. The different responses to modernity described here are easily recognisable in the various literary trends of Japan, colonial Korea and beyond, which thus come into view as specific yet generalizable in their historical situations.

リサーチガイド【モダニズム期における日本の広告写真】

名古屋芸術大学　松實輝彦

◆　ナオミ・ローゼンブラム『写真の歴史』　美術出版社　1998 年

19 世紀から現代に至る写真の歴史を、アメリカの写真史家ナオミ・ローゼンブラム（1925～）が包括的に記述した大著。1984 年に初版が刊行され、日本語版は 1997 年に増補改訂された第三版を底本としている。日本語版の監修者は飯沢耕太郎。概説的な通史にとどまらず、メディアの歴史における写真の意義を肖像、記録、広告、フォト・ジャーナリズム、写真技術史等の多様なテーマでまとめ、世界的に定評のあるスタンダードな写真史の教科書となっている。同書の第 10 章は「言葉と映像――印刷メディアにおける写真 1920－1980」。その章中で小石清の広告写真《スマイル目薬》（1930）の図版が掲載され、「日本のコマーシャル写真家たちはクローズアップ、奇抜なアングル、モンタージュなどを駆使することで、モダン・スタイルに遅れをとらずにいた」と紹介されている。

◆　松實輝彦『広告写真のモダニズム　写真家・中山岩太と一九三〇年代』　青弓社　2015 年

日本においてモダニズムという表現様式と近代特有のメディアである広告が出会った 1930 年代。中山岩太の広告写真《福助足袋》（1930）は商業美術や写真界に衝撃を与え、その後の広告文化に影響を及ぼした。本書はモダニズムの写真家・中山岩太が歩んだ道のりに写真展の隆盛、写真をめぐる論争、ジャーナリズムの勃興といった社会状況を重ね合わせた広告写真小史であるが、その前半部では中山にとっての年若きライバルとして小石清が登場する。また後半部では西村皎三『詩集・遺書』に挿入された小石の作品《朝》（1938）について簡略ながら、「煉瓦塀が破壊されたあとの情景が、大陸の強い朝日の下で捉えられており、やりきれない虚無感とともに奇妙にシュールな感覚を漂わせている。（略）《半世界》連作と非常に近い世界観だといえる」と記述されている。

◆　東京都写真美術館編『『光画』と新興写真　モダニズムの日本』　国書刊行会　2018 年

東京都写真美術館学芸員・藤村里美の企画・構成による同名の展覧会図録も兼ねた大判の写真集＋解説書。戦前期の日本にあって、「写真にしかできない表現」を求め、前衛芸術の世界を彗星のように駆け抜けた新興写真運動。本書はその幻のごとき作品世界を『光画』（1932－33、全 18 号）と『新興写真研究』（1930－31、全 3 号）という稀覯写真誌を中心に振り返る、モダニズム期写真史研究の最新報告書でもある。中山岩太は野島康三、木村伊兵衛とともに『光画』の同人であり、常に冷静な眼差しで同時代の写真動向を見つめていた。小石清の写真集『初夏神経』（1933）は、そんな中山をはじめとする『光画』の同人たちや周辺の前衛写真家たちにも大きな衝撃を与えた。本書では小石の代表的な広告写真や『初夏神経』の書影と作品《自己凝視》が収録されている。

科学研究費基盤研究（C）（研究代表者：波潟剛、18K00509）
「オーバーラップする異国趣味・郷土主義―東アジアモダニズム研究の基盤構築に向けて」

リサーチガイド

Research Guide by Okawachi Natsuki

大岡信『昭和詩史』（思潮社、1977 年 4 月）

本書は、1920 年頃から 1945 年頃にかけての日本の詩について、２部構成で論じたものである。第１部「昭和詩史」では、1920 年代の未来派やダダなどの運動から始めて、プロレタリア詩、雑誌『詩と詩論』、『詩・現実』、『コギト』、『四季』、『歴程』と、様々な詩的グループの活動や作品の特徴を記述している。また第２部の「昭和詩人論」では、西脇順三郎、三好達治、菱山修三など、この時期に重要な役割を果たした詩人について個別に論じている。大岡は「あとがき」において、「現在の文学研究の趨勢は、はてしなく個別研究の精密化が進む一方で、通史的概観のような大づかみの試みは影をひそめる傾向」（277 頁）にあると述べているが、こうした指摘は、現在の研究にも当てはまる面があるように思われる。「通史」的性質を有したモダニズム詩の研究書が多いとはいえない状況の中で、本書は、モダニズム詩の展開を把握するための大きな助けとなるだろう。また大岡の著書としては、シュルレアリスムを中心に日本のモダニズム詩に批判の目を向けた『超現実と抒情――昭和十年代の詩精神』（晶文社、1965 年 12 月）もあわせて読みたい。

和田博文『テクストの交通学　映像のモダン都市』（白地社、1992 年 7 月）

本書は、モダニズムの詩や小説、さらには映画、美術などを成立させる背景となった「モダン都市」や「都市モダニズム文化」に関する多くの一次資料を発掘・紹介しながら、日本のモダニズムに新たな光を当てたものである。それは、欧米のモダニズムをオリジナルと見なし、それとの共通性や差異によって日本のモダニズムを位置づけようとするのではなく、モダニズムというものの〈複数性〉を前提としつつ、その１つのケースとして、日本のモダニズムを考察しようとする試みであったともいえる。本書の「プロローグ」には、「テクストの幅は、文化の幅に比べて狭くはない。しかも文化には時間が堆積している。だからテクストの交通を語る困難は、無限の海を前にしたときの、茫洋とした感覚に似ている。だが立ちすくんでいても仕方がない。海のすべてを語ることはできないが、選んだ水路に従って海と対話することはできるだろう」（22-23 頁）と述べられているが、その「対話」の結果の１つとして、全１００巻に及ぶ和田監修の復刻版シリーズ『コレクション・モダン都市文化』（ゆまに書房、2004～2014 年）が挙げられる。

瀬尾育生『戦争詩論　1910-1945』（平凡社、2006 年 7 月）

本書は、なぜモダニズム詩人たちは、いわゆる戦争詩を書いたのか、あるいは書き得たのかという問題について、1920 年代頃に書かれた作品と 1937 年以降に書かれた戦争詩との共通性に目を向けつつ論じたものである。モダニズム詩人による戦争詩の問題は、吉本隆明による議論をはじめ、これまで様々に論じられてきたが、本書の大きな達成は、詩人たちの１つ１つの詩や詩論そのものを丁寧に読み込むことによって、戦前・戦中の連続性を明確に示したことにあるといえる。とりわけ「モダニズムが敗北してナショナルなものが露出してきたのではない。モダニズムは、帝国主義時代に獲得した方法の機能的な普遍性、かつては国民批判として機能したそのイデオロギーとフォルマリズムによってこそ、戦争詩のウルトラナショナリズムに合流する。戦争詩は、抒情を敵とし地方性・風土性を排除して、テクノロジーの「世界」性に加担してきたモダニズムの方法の、挫折ではなくて、完成なのである」（124 頁）という指摘は、非常に刺激的である。本書の刊行は、モダニズム詩、戦争詩の研究における大きな問題提起となったが、その問題意識を引き継いだものの１つである矢野静明『日本モダニズムの未帰還状態』（書肆山田、2016 年 7 月）も参考になる。

科学研究費基盤研究（C）（研究代表者：波潟剛、18K00509）
「オーバーラップする異国趣味・郷土主義―東アジアモダニズム研究の基盤構築に向けて」

Research Guide by Te-Gyung Kim

1. 강인숙 『일본 모더니즘 소설 연구』(생각의 나무, 2006)

이 책은 한국에 있어 일본 모더니즘 소설 전반을 폭넓게 다룬 최초의 저작이다. 부제를 통해서도 알 수 있듯이 저자는 일본의 모더니즘 운동은 신감각파, 신흥예술파, 신심리주의파의 세 그룹으로 나뉘어져 진행되었으며, 각 그룹은 한 사람의 문인에 의해 주도되었다고 파악한다. 요코미쓰 리이치가 신감각파를 대표하듯이, 류탄지 유는 신흥예술파를 대표하고, 신심리주의는 이토 세이에 의해 대표된다. 그래서 일본의 모더니즘은 요코미쓰 리이치의 감각의 새로움, 류탄지 유의 도시풍속 묘사의 파격성, 이토 세이의 내면심리 분석의 집요함을 합산해 추출할 수 있다고 한다. 결론에서 저자는 반(反) 전통의 자세, 반(反) 프롤레타리아 문학, 현실 이탈 현상, 감각주의, 사소설과의 애매한 관계를 세 유파의 공통분모로서 제시한다. 한국근대문학 전공자가 한국과 일본 모더니즘의 상관관계를 연구하는 과정에서 나온 부산물임과 그에 따른 한계를 저자 스스로가 밝히고 있으나, 일본 모더니즘 문학의 전체상을 소개하고자 한 선구자적 의의는 크다.

2. 日本文学研究資料叢書『横光利一と新感覚派』(有精堂，1980)

本書は、日本のモダニズム文学運動を牽引した横光利一や新感覚派を研究するに必需の歴史的な資料集である。前半は横光利一文学に関する主な文献、後半は文学流派としての新感覚派に関する主要な文献を、昭和四十年までを一区切りとして収録している。第一部は、斎藤龍太郎「横光利一氏の芸術」、壺井繁治「横光利一君の朦朧性」等の同時代評を始め、杉浦明平や岩上順一らによる戦後の批判、さらには後代の研究者による研究論考を適宜紹介している。第二部も構成面では同様で、新感覚派の名称に深く関わりのある千葉亀雄「名は所詮一の概念」を始め、新感覚派の当事者性を有する片岡鉄兵「若き読者に訴ふ」「新感覚派は斯く主張す」のような同時代の評論が続き、最後は野間宏、成瀬正勝、磯貝英夫ら後進による新感覚派論を収集している。河上徹太郎・寺田透・保昌正夫の三人による「〔座談会〕横光利一」、片岡鉄兵・川端康成・横光利一・中河与一らの同人が顔を合わせ「文芸時代」時代を振り返った「〔座談会〕『文芸時代』」をも収録している。

3. 金泰曄『横光利一と「近代の超克」―『旅愁』における建築、科学、植民地』(翰林書房，2014)

戦前、横光利一は「文学の神様」と崇められた。しかし、横光をめぐる文学的評価は、戦後、がらりと変わる。この際、横光利一という作家をめぐる評価軸として最も機能したのが、昭和戦前の最大問題作『旅愁』である。時局に迎合したファナティックなナショナリズム小説として断罪されてきたのであるが、このように『旅愁』というテクストを切り捨てたまま、横光利一、あるいは昭和十年代の文学を語ることに躊躇いはないのだろうか。彼が偉大な失敗作『旅愁』の作家であるがゆえに敗戦以前の昭和文学を代表できる、ということを考えるとなおさらである。横光後期、未完の『旅愁』が、現在のわれわれに残している可能性とは何か。小説『旅愁』に秘められた最大限の可能性を見出すこと、本書が挑むのはこの課題である。そのために著者が用意したキーワードは建築、科学、植民地の三つである。それぞれが本文の三部を構成しているような体裁になっている。日本のモダニズム文学の一帰結を示した力作である。

Research Guide By Kim, Jinhee

1. 한국미술연구소 한국근대시각문화연구팀, 『한국근대미술 시각이미지 총서 1-3』, CAS, 2018.: 이 총서는 『모던 경성의 시각문화와 관중』, 『모던 경성의 시각문화와 창작』, 『모던 경성의 시각문화와 일상』 등 총 3권으로 이루어진 것으로, 자료집 및 연구서의 성격을 가진 책이다. 1920년대 이후 식민지 도시 경성을 중심으로 진행된 도시화, 문명화, 대중화 등 일련의 변화는 시각을 통해 당대인들이 모던을 체험하고, 학습하고, 일상화하고, 내면화하게 만들었다. 이 책은 당시 '모던'을 이끌었던 대중매체인 신문에 수록된 이미지 자료를 주제별로 수록하여 해제를 붙이고, 관련 연구를 제공함으로써 식민화와 모던화가 중첩된 경성의 실상에 구체적이고 깊이 있게 접근하게 한다. 『모던 경성의 시각문화와 관중』에서는 경성의 시각문화가 관람, 매체, 전시 시설 등을 통해 공공화하고 대중화하는 양상과 이를 소비하는 주체인 관중을 부각시키고 있다. 『모던 경성의 시각문화와 일상』에서는 의(依), 식(食), 주(住) 이미지를 통해 경성인의 일상의 실제를 들여다 볼 수 있게 한다. 그간 식민지 도시 경성에 관한 이미지 자료와 연구는 많이 진행되어 왔는데, 이 총서는 보다 풍부하게 자료와 논의를 보강함으로써 한국 모더니즘의 현장인 도시 경성에 대한 감각적 체험과 이해에 기여할 것이다.

2. 한석정, 『만주모던 : 60년대 한국 개발체제의 기원』, 문학과 지성사, 2016.:이 책은 식민주의와 근대란 밀접하게 관련된 것이라는 입장에서, 만주국에서 경험하고 학습한 개발 강박적, 하이 모던(high modernism)이 1960년대 한국의 국가개발 논리의 토대가 되었음을 밝히려는 연구서이다. 추천인이 이 책에서 특히 주목한 것은 60년대 한국개발체제의 기원으로 소환된 '만주 모던'에 관한 풍부한 자료와 새로운 접근 방식이었다. 저자는 그간 한국과 중국, 일본의 각기 다른 정치적 입장과 내셔널리즘의 담론에 의해 조명되어 온 만주를 예술과 문화의 국제성과 융합성 등이 실험되는 시공간으로 주목한다. 또한 1930년대 만주국을 공간적으로는 한반도 조선과 일본으로 확장시키고 시간적으로는 만주국 이전과 이후로 연장함으로써 만주 모던을 동아시아는 물론 세계라는 시공간 속에 위치시킨다. 1930년대 만주는 지역적으로 한반도는 물론 일본의 대중과 일상의 삶을 움직였고, 철도와 기차의 발전을 선도했을 뿐만 아니라 2차 대전 후, 중국과 러시아, 나아가 한국에 경제적, 정치적 토대를 제공했다. 이 책은 다양한 정치적, 역사적, 문화적 참고문헌을 통해 만주 모던의 역동적 실상을 제공한다는 점에서 만주에 관심을 갖는 연구자들에게 가치가 있는 연구서이다.

3. 김기림 『시론』 백양당, 1947.:이 책은 1930년대에서 40년대에 이르는 기간에 신문과 잡지에 발표한 시론을 김기림 자신이 출간한 시론집이다. 김기림이 당대 시단의 주류였던 '감상(感傷)'을 비판하면서, 도시와 문명에 대응하는 새로운 시학으로 모더니즘을 입론화(立論化)하는 과정을 읽을 수 있다. 뿐만 아니라 모더니즘 시학의 기술(記述)과 방법론, 주지적 태도, 그리고 전위적 시정신의 토대로 초현실주의가 상세히 수용, 소개되어 있다. 김기림의 시론을 통해 1930년대 이후 한국 모더니즘에 대한 이해는 물론 동시대 일본과 서구 모더니즘에 대한 비교 논의와 이해가 가능하다는 점에서 일독(一讀)할 자료이다.

Research Guide by Kim Yerhee

1.김윤식, □『이상문학 텍스트 연구』, 서울: 서울대학교출판부, 1998.:□『이상문학 텍스트 연구』는 한국의 30년대 모더니즘 문학을 대표하는 작가 이상(李箱)에 대한 연구서이다. 이 책의 저자 김윤식(金允植) 교수(1936~2018)는 한국근대문학연구의 기틀을 세웠다고 평가되는 석학이다. 그의 연구에서 중요한 키워드는 국민국가(nation)와 자본제 생산양식(capitalism)이다. 이 두 키워드에 따라 그는 제도로서의 근대를 설명했고, 한국근대문학연구의 체제를 구축했다. 그런데 그는 이런 관점에서 설명되지 않는 작가와 마주했고, 그 작가는 바로 이상이다. 이상은 민족 언어 공동체라는 보편성에서 엇나가 있는 존재였다. 이상은 일본어와 조선어를 구분 없이 겹쳐 썼고, 이런 겹쳐 쓰기의 맥락에 민족이라는 개념은 작동하지 않았다. 그런 그가 보는 세계의 풍경은 기괴하거나 파악 불가능했으며, 심지어 소실점의 자리에서 전지적 권위를 행사하고 있는 작가 주체로서의 '나'의 위치를 지워버렸다. 김윤식은 이러한 이상문학에서 작가와 작품의 개념에서 텍스트와 수행성으로서의 글쓰기의 개념으로, 다시 말해 근대에서 포스트 근대로의 이동을 살핀다.

2.란명 외, 『이상적 월경과 시의 생성>』, 서울: 도서출판 亦樂, 2010.: 이 책은 한국 모더니즘 작가인 이상 연구서이지만, 독특하게도 일본문학 학자에 의해 기획되고 편집된 비교문학연구서이다. 편저자인 란명 교수(1955~2015)는 중국 출신의 일본문학연구자로 '월경'의 관점에서 한국문학이 일본문학을 어떻게 수용하고 변용했는가를 동아시아의 관점에서 살피는 연구서를 기획했다. 이 책은 동아시아적 시선으로 이상 문학과 『詩と詩論』을 비교하고 있는 연구 논문들이 주를 이루고 있지만, 아쿠타카와 류노스케나 요코미쓰 리이치와 같이 이상이 자신의 작품에서 직접 언급하고 있는 작가의 문학과 이상 문학을 비교하는 연구 논문도 함께 수록되어 있다. 특히 이 연구서는 연구논문 외에도 일본 모더니즘 시 잡지 『詩と詩論』에 수록된 주요 작가의 주요 작품을 한국어로 번역하여 한국 독자에게 일본 모더니즘 시 텍스트를 소개하고 있다.

3.강용훈 외, 『동아시아 예술담론의 계보』, 서울: 너머북스, 2016.: 이 책은 문학, 미술, 역사 등을 전공하고 있는 한국의 젊은 연구자들이 다종다기한 관점에서 동아시아 예술담론의 계보를 추적하고 있는 연구서이다. 이 책은 'art'의 번역어로서의 '예술' 개념이 중국, 일본, 한국 등 동아시아의 국가적 경계를 횡단하는 과정 위에서 어떻게 전유되고, 그 과정에서 생산된 예술담론이 어떤 창조적 사유를 보여주고 있는가를 탐색한다. 이 책의 저자들은 예술 개념의 정립 과정이 근대 담론 자체의 제도적 요인과 밀접하게 연결되어 있지만, 동시에 예술 주체들은 미학적 실천을 통해 '제도로서의 예술'을 비판하고 삶과 예술의 관계를 바라보는 새로운 시선을 창조하였다는 관점을 보여주고 있다. 이러한 관점에서 이 책은 동아시아에서의 예술 담론이 보여주는 역동적이고 창조적인 사유를 탐색한다. 이 책의 1부 '동아시아의 예술 개념의 횡단'에서는 19세기 말에서 20세기 초반 '예술' 개념이 언어의 경계를 넘어서 한국, 중국, 일본에 역동적으로 유통된 양상을 살펴본다. 1부가 '동아시아'로 지평을 확대하여 예술 개념의 재구축 양상을 다루었다면, 2부 '식민지 조선의 '예술' 개념 수용과 문학장의 변동'은 1920년대부터 일제 말기까지 식민지 조선에서 미학적 주체들의 활동 양상에 초점을 맞추었다. 김찬영, 김동인, 염상섭, 임화, 김기림, 최재서 같은 지식인들이 '예술' 개념을 어떻게 전유했는지와 그 전유 과정이 식민지 조선의 문학장에 미친 효과를 보여준다.

リサーチガイド

Research Guide by Masato SANO

１　Douglas Mao and Rebecca L. Walkowitz「The New Modernist Studies」

モダニズム研究（モダニズム・スタディーズ）が近年新たなグローバル的展開を示している。このダグラス・マオとレベッカ・ウォルコウィッツによる 2008 年の論文「The New Modernist Studies」は、最近のモダニズム研究の方向性を鮮やかに目に見える形で示し、大きな影響力を与えたものである。

3 節からなっているが、「モダニズムの拡張」、「トランスナショナル的転回」、「大衆的説得の時代におけるメディア」というそれぞれのテーマがきわめて説得的であるとともに刺激を与えてくれるものである。詳しくは本論文にあたってほしいが、ことに強調されているのは第二節で扱われているモダニズム研究のトランスナショナル的転回（Transnational Turn）についてである。豊富な著書や論文の引用と共に示される「他の文化伝統の包含」「トランスナショナルな循環や翻訳」「帝国主義に対する反植民地主義的対応」といったトランスナショナル的転回をめぐるテーマはそれぞれ大変興味深い。

２　張隆溪『比較から世界文学へ』（水声社、2018）

現在の国際比較文学会会長でもある張隆溪（チャン・ロンシー）による「世界文学」をめぐる論考を集めた著書で原書は 2015 年に出版されている。比較文学という学問がヨーロッパ中心主義的な枠組みの下にあったことを指摘し、それを乗り越える「世界文学」の構想を示している。ことに中国出身の著者として中国文学の「世界文学」的読み替えといった課題を様々な具体的な実例を通して試みている。比較文学というディシプリンへの批判、反省は G.スピヴァック『ある学問の死　惑星思考の比較文学へ』、フランコ・モレッティ『遠読　〈世界文学システム〉への挑戦』など多いが、アジア（文学）の側からの反応という意味で、この張隆溪の著書は一読に値する。

３김소영　편저　『트랜스　;　아시아　영상문화』（金素栄『トランス：アジア映像文化』、現実文化研究、2006）

本書は映像文化に関する論文集だが、韓国はアジアの各地域、各文化を接合し、トランス・アジア的な構想をするのに最適な地政学的位置にある。実際、この本の編者である金素栄が教授を務める韓国芸術総合学校映像院には東アジア映画専攻があり、アジア映画の比較研究が実践されている。それはある意味で比較文学に先行していると考えられる。

第 1 章「トランスアジア映像文化」、第 2 章「（トランス）アジアシネマ」、第 3 章「（東）アジア´ナショナル‘シネマの新たなトピック」の 3 章からなるが、韓国、日本、中国、台湾の筆者にとどまらず、シンガポール、オーストラリア、アメリカの世界的なメンバーによって「トランスアジア映画」の再概念化と方法論的な試みが行われている。

ことにモダニズム研究において「アジア的モダニズム」「トランスアジア的モダニズム」という問題が提起されうるとしたら、本書はその大きな参考となるものと考えられる。

科学研究費基盤研究（C）（研究代表者：波潟剛、18K00509）
「オーバーラップする異国趣味・郷土主義―東アジアモダニズム研究の基盤構築に向けて」